

序

雲英末雄

心待ちにしていた佐藤勝明君の論文集「芭蕉と京都俳壇」が、いよいよ刊行されることになった。長年、このテーマに取り組んで真摯な努力を続けてきた佐藤君の姿を近くで見ているので、我がことのようにうれしく喜ばしい。

俳諧史の中で、芭蕉はきわめて卓越した存在である。そのことは既成の事実のように考えがちであるが、なぜ芭蕉が芭蕉としてその存在をきわだたせているのか、芭蕉の芭蕉らしさ、つまり蕉風俳諧の特質とは何かという問題は、必ずしもすべて解明されているわけではない。

貞門や談林の俳諧を経て、いかにして芭蕉は独自の蕉風俳諧を確立させたか。この初期蕉風の発動に正面から取り組んで、佐藤君はそのキーポイントを延宝期（二六七三―一六八〇）と天和期（二六八一―一六八四）の間にありと考えるに至った。そこで延宝九年（二六八一）の藥躰^{ひび}宛芭蕉書簡の分析を通して、「深切」の情の重視に着目したのは、佐藤君のオリジナルな発見であり、その具体的な考察は大いに評価すべきであろう。

ところで佐藤君は一見迂遠なようだが、京都俳壇の延宝・天和期に活躍する、いわゆる遊俳たち——井狩友静、小山重尚、望月千之・千春、青木春澄——の俳歴や作風を丹念に追究し、彼らと芭蕉らとの東西の交流、